

福島県文化財センター白河館収蔵資料の紹介

―檜葉町鍛冶屋遺跡出土 和鏡―

阿部 知己

要 旨

白河館に収蔵される資料のうち、双葉郡檜葉町鍛冶屋遺跡から出土した和鏡について紹介する。

キーワード

蓬莱鏡 室町時代前期

1 はじめに

福島県双葉郡檜葉町鍛冶屋遺跡出土の銅鏡は、2000年に実施された発掘調査後、和鏡の写真(X線写真を含む)、そして出土状況等が報告書に掲載されたのみであったため、今回鏡を実測し、改めて報告する。

2 遺跡紹介

鍛冶屋遺跡は、福島県檜葉町大字上小塙字鍛冶屋ほかに所在する。常磐自動車道の建設に伴い平成10～12(1998～2000)年の3か年にわたり、21,000㎡を対象とする発掘調査がすすめられた。

鍛冶屋遺跡は、東流する木戸川の南岸、標高約48m前後の段丘上に位置している。東西に延びる段丘上には、今回紹介する鍛冶屋遺跡と、その北側に隣接して縄文時代中期の集落跡が主体となった馬場前遺跡が位置する。さらに、鍛冶屋遺跡の南側、谷を挟み別の段丘の先端部には、14～16世紀代に築かれた城館跡、小塙城跡がある。

鍛冶屋遺跡での3か年の発掘調査の結果、128軒の住居跡(大半が奈良・平安時代の住居跡)、51棟の建物跡(大半が平安時代)、6基の鍛冶遺構(平安時代、中世以降)、2基の水場遺構(古代・中世)、2,300基を超える柱穴群(古代、中世以降)などが確認された。

3 和鏡の詳細

名 称 蓬莱鏡

法 量 直径10.2cm、厚さ5mm、重さ90g

時 代 鏡背の文様、鏡の大きさなどから判断し、室町時代前期のものと考えられる。

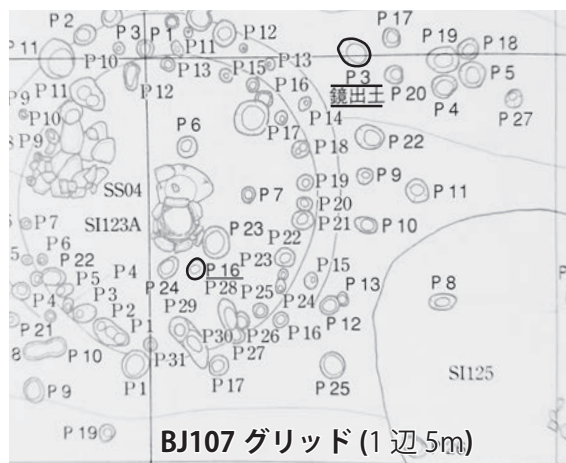
出土位置 遺跡南東側BJ107グリッド内の柱

穴(P3)覆土内から出土している。柱穴(P3)は、南側へ延びる緩い谷頭部に位置する。出土位置から南に小塙城跡を臨むことができる。ちなみに、鏡が出土した同じグリッド内で見つかった別の柱穴(P16)の覆土からは13世紀後半から14世紀ごろの龍泉窯系青磁盤の小片が出土している。

出土遺構の規模等 平面形状は楕円形。規模は、長軸36cm、短軸35cm、深さ59cmを測る。



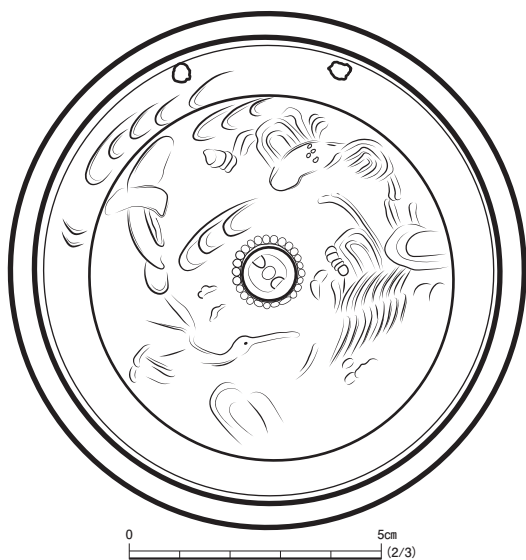
第1図 鍛冶屋遺跡と周辺遺跡



第2図 鏡出土位置



第3図 和鏡（1）



第4図 和鏡（2）

鏡出土状況 柱穴の底面から40cmほど上位から、鏡背を上に向けた状態で出土した。

鏡の特徴 鏡は、小型円形の銅鏡で、鏡背の文様は磨滅と腐食で判別が難しい。

第3図左の実測図を見ると、鈕(ちゅう)の右上部分、全体の5分の1ほどが約30度の角度で鏡背側に折れ曲がっている。

鈕の周りには、花芯を表現するように、小さな珠文を20数個配している。

縁の断面は、上端幅5mmほどの四角形。縁の内側は、低く細い線で区切られている。細線の外側の区画には、大ききの違う「し」字状の線を連続させ、



雲?を表現している。

外区の左上には、鏡製作後、3～4mmの不整形な穴を2個穿っている。このことから、鏡としての役割だけでなく、礼拝用などとして吊り下げられていた時期もあったことが分かる。

細線の内側の表現は、吊り下げ穴を上位にした状態(第4図)で見ると分かり易い。鏡の12時から3時までの間には、「∩」、「∪」などの線を複数用いて蓬莱山と見られる表現を施している。蓬莱山の真下には、「∩」、「し」字状の線を狭い間隔で連続させることで、水の流れと砂浜を表現している。鏡の6時から7時までの間には、一羽の鶴が右側の蓬莱山へと飛んでゆく姿が描かれている。

【引用参考文献】

財団法人福島県文化振興財団 2002「鍛冶屋遺跡（3次調査）」
『常磐自動車道遺跡調査報告 28』

【図・写真】

図1・2 常磐自動車道遺跡調査報告 28より抜粋。

図3・4 筆者が作図・撮影した。